

島根原子力発電所 P R 館移設計画に伴う

名分丸山古墳群測量調査報告書

1984年1月

島根県 鹿島町教育委員会

例　　言

1. 本書は、鹿島町教育委員会が中国電力株式会社の委託を受けて実施した島根原子力発電所 P R 館移設計画に伴う名分丸山古墳群測量調査の記録である。
2. 遺跡は、島根県八束郡鹿島町大字名分字丸山 1602-1 番地に所在し、現状は山林である。
3. 調査は、昭和58年3月7日から15日までのべ8日間実施した。調査体制は以下のとおりである。

事務局　門田　正幸（鹿島町教育委員会教育次長－当時）

曾田　稔（　同　社会教育主事）

調査員　赤沢　秀則（　同　嘱託）

4. 調査にあたっては、中国電力株式会社、八雲建設コンサルタント、株式会社佐藤組の協力があり、島根県教育委員会文化課からは指導をいただいた。記して謝意を表する。

5. 測量調査によって、1号墳は町内でも最大級のものであり、前方後方形を呈する上に古墳としては古い形態をとるものであることが判明したので、2・3号墳も含めて当古墳群は現状のまま保存するのが望ましいとの結論に達した。この意向を事業者である中国電力株式会社に伝えたところ、全面的な協力をいただくことができ、当該地での島根原子力発電所 P R 館移設計画は変更していただける運びとなった。中国電力株式会社の御理解に對して謝意を表したい。

目　　次

I 調　　査　の　経　緯	1
II 周　　辺　の　古　墳　群	2
III 調　　査　の　概　要	4
IV 小　　　　結	9

I 調査の経緯

昭和57年12月3日付で中国電力株式会社島根原子力事務所から鹿島町教委宛に原子力発電所PR館移設予定地内の遺跡分布調査の依頼があった。それを受け町教委は、翌58年1月25日土地所有者中国電力株式会社の立会いのもとに分布調査を実施した。その結果、中国電力社有地内に古墳3基を確認した。

この調査結果をもとに、中国電力株式会社と鹿島町教委は協議を行い、遺跡の重要度を知る資料を得るために、当該地の測量と部分的な発掘調査を行うこととした。

この合意によって中電からは1月25日付遺跡発見届及び、1月28日付発掘届の提出を得、鹿島町教委も1月28日付発掘通知を提出した。

3月1日付で中電と町は委託契約を締結し、3月7日から調査を開始した。

約1週間の測量調査の結果、名分丸山1号墳は全長約40mの町内で最大級の古墳である上に前方後方墳であり、前方後方墳としては県下でも有数の規模を有することが判明して町教委は、この時点で当初からの目的であった遺跡の重要度を判断する資料は得られたものと考え、3月14日急遽、中電と協議し、同日から開始する予定の発掘調査は停止した。町教委は県教育庁文化課の指導も得て、同月18日中電と再度協議して、遺跡の重要性を考えると、当該地で土工事を行うことは困難ではないかとの考えを伝えた。

この後4月13日、中国電力からPR館を当該地に建設する計画は断念する旨の連絡があり、調査は正式に終了した。



第1図 名分丸山古墳群位置図

Ⅱ 周辺の古墳群

鹿島町内には多くの古墳が知られているが、近時ますますその様相が明らかになりつつある。本報告の丸山古墳群の所在する名分地内には、奥才古墳群¹、鶴瀬山古墳群²、かまの古墳群³、小川古墳群⁴などが知られている。北講武では、尾坂古墳群⁵、向山古墳群⁶、南講武では、中尾谷山古墳群⁷、上講武では石津古墳群⁸などがある。その他、単独で存在する古墳も多く知られている。

これらの古墳群は、島根半島部ではかなりの規模を有する講武平野をとりかこむ山塊上に営まれている。その他の地区では単独墳が主で、群をとるとしても2～3基程度のようで安定した水田を有する講武地区が卓越した生産力を有していたものと考えられる。しかし、講武以外の地区での実態は未だ不明な部分も多く今後に残された課題も多い。

以下各古墳群の概要を紹介する。

奥才古墳群は、40余基からなり大形の古墳を中心にしてそれに中小の古墳が付き従うといった群構成をとっている。ここでは大形の古墳に疊床を有する箱式石棺が採用され、そ



第2図 名分丸山古墳群と周辺の遺跡(1 / 50000)

1. 名分丸山古墳群
2. 奥才古墳群
3. 鶴瀬山古墳群
4. かまの古墳群
5. 小川古墳群
6. 尾坂古墳群
7. 向山古墳群
8. 中尾谷山古墳群
9. 面目古墳
10. 狐堀古墳
11. 曰畠古墳
- A. 古浦砂丘遺跡
- B. 志谷奥遺跡
- C. 佐太前遺跡

れ以外の古墳では、礫床を有する木棺が主流を占めるようである。その他、比較的古式の須恵器を伴う竪穴式石室も知られている。出土遺物は、仿製內行花文鏡、方格文鏡、紡錘形石製品、石鏃などである。

鶴瀧山古墳群は10余基からなり、うち6号墳は前方部の開かない比較的古式の前方後円墳で注目される他、中小の古墳で構成されており、その時期とともに奥才古墳群と平野を挟んで向かい合う立地も注目される。

尾坂古墳群は、平野に臨む低い尾根上の古墳群で、丘陵突端から礫床を有する横穴式石室（箱式石棺か）であったと伝えられる荒神古墳、箱式石棺を有し、鉄劍2、直刀1、鐵鎌14、櫛の出土した中ノソラ古墳、須恵器の出土が伝えられる尾坂古墳および北田古墳からなっている。

かまの古墳群は、名分丸山古墳群と同一の丘陵上に存在する古墳群で5基からなり、墳丘上に円礫の散乱するものがあり、奥才古墳群同様、主体部に礫床を採用するものであることが知られる。

向山古墳群は、北講武の水田にのぞむ低い尾根上に存在し、墳丘上に円礫が散乱して礫床が推測される雉ヶ崎荒神古墳、すでに消滅しているが、横穴式石室を有していたと伝えられ、鉄劍2、須恵器子持壺などを出土した向山古墳からなっている。

中尾谷山古墳群は、古く箱式石棺が発見された5号墳や全長17mの小形の前方後方墳である2号墳などからなっている。

その他、上講武では礫床を有する箱式石棺であったと伝えられる松尾古墳、やはり箱式石棺を有していた石津古墳群が知られている。また、名分丸山古墳群に近く埴輪を有する^{注10}面目古墳、^{注11}恵曇では礫床を有する箱式石棺の弧掘古墳、須恵器を伴い礫床・箱式石棺の白畑古墳などが現在に至るまで知られてきている。

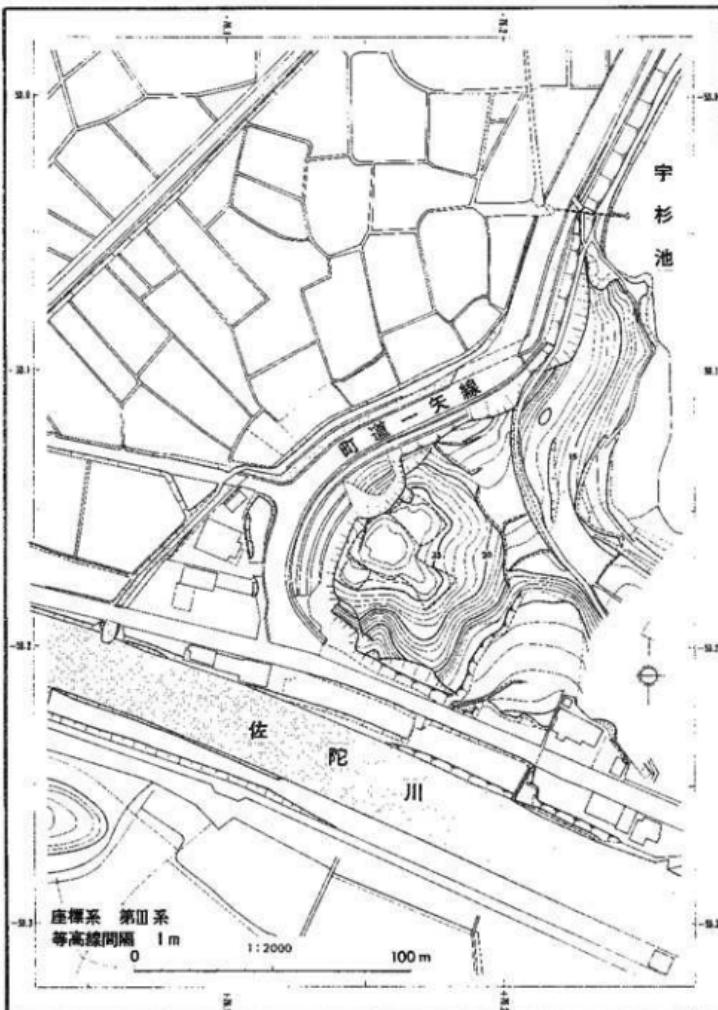
これらから鹿島町内では古墳時代前期から後期前半代にまで礫床を有する木棺あるいは石棺が主流を占めているようである。この傾向は当町内にとどまらず、出雲地方東部の傾向として捉えられそうである。

かなり大形の古墳群が分布する講武地区では群毎に若干の時期的なズレはありそうだが平野の各地点に拠点的に古墳群が營造されているようである。そういう動向の中で古式の様相を呈する名分丸山古墳群の出現は、同様に前期からの古墳群と考えられる奥才古墳群、鶴瀧山古墳群との関係からの検討が加えられなければならないであろう。

また、古墳はある程度明らかになりつつあるが、それらの古墳群を營造した人々の生活址である集落遺跡の分布は全くといってよいほどわかつておらず、今後に残された大きな課題である。

III 調査の概要

名分丸山古墳群は、江戸時代に開削された佐陀川が大きく流れを西に変え、南北に丘陵が迫り、最も狭隘になる地点の北岸丘陵上に位置している。この丘陵は、南北約200m、



第3図 名分丸山古墳群周辺地形図

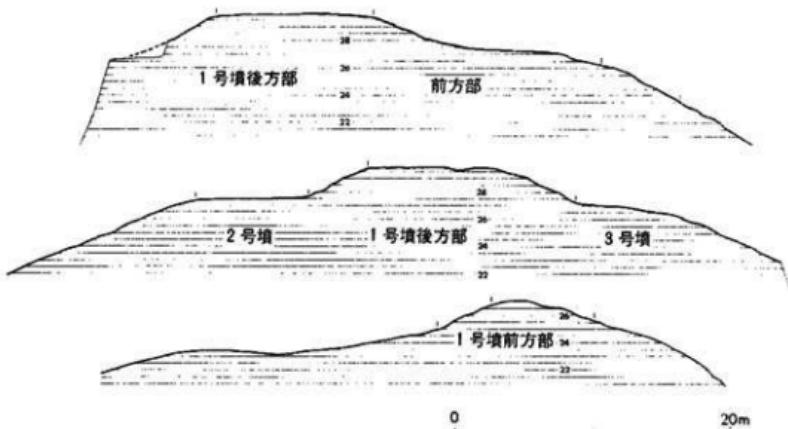
東西約400mの独立丘陵で、東西に名分、一矢の小平地を見おろすことができる。尾根上には5ヶ所の高所を有し、東端の高所には5基からなり、礎床の主体部をもつと考えられるかまの古墳群が位置し、最西端の高所に当該名分丸山古墳群が位置している。

この丸山古墳群は、3基からなり最高所に位置する前方後方墳である1号墳とそれにはとんど接するように2・3号墳が位置している。標高は約23mから30mにかけてである。

1号墳は、'68年町道一矢線新設に際しての十取りで後方部北西側墳裾が削られてはいるが、推定全长約39m、南東に前方部を向ける前方後方墳である。主軸沿いの後方部長は22m、前方部長は17mである。墳丘基底面の標高は、後方部南側で26.5m、同東側コーナー付近では27.0m、前方部端では23.5mで後方部と前方部の高さには大きな差がある。

後方部は、正確な方形の平面形を呈さず、前方部側で幅の狭くなる台形状を呈している。後方部北西側はさきに述べたように土取りで削られている他、北東斜面から西斜面にかけて後方部を横断するように道によって削られているが、全体に旧状をよく保存しているようと思われる。墳裾からの比高は測点によって異なるが、3.0～3.5mである。斜面に段築などの施設はない。墳頂平坦面は、主軸に平行に11.5m、垂直に9.0mと長方形を呈し、広い。

前方部は、南側端部などややくずれて墳端を示しえないところもあるが、くびれ部から約7mはほぼ直線的にのびた後に大きく開くいわゆる撥形を呈している。くびれ部では幅8.5m、前方部端で幅は推定16.0mを測る。前方部上端のラインも同様に撥形に開くよう



第4図 名分丸山古墳群墳丘断面図(1/400)

に観察できる。墳丘は斜面に築造されているため、前方部は著しく低く、後方部墳裾を通るコンターラインは、前方部上端端部とほぼ一致している。前方部墳裾は北東側で明瞭で墳裾推定線とコンターラインの屈曲がよく一致する。この部分での前方部の比高は2.25m、前方部端部での比高は2.5mである。

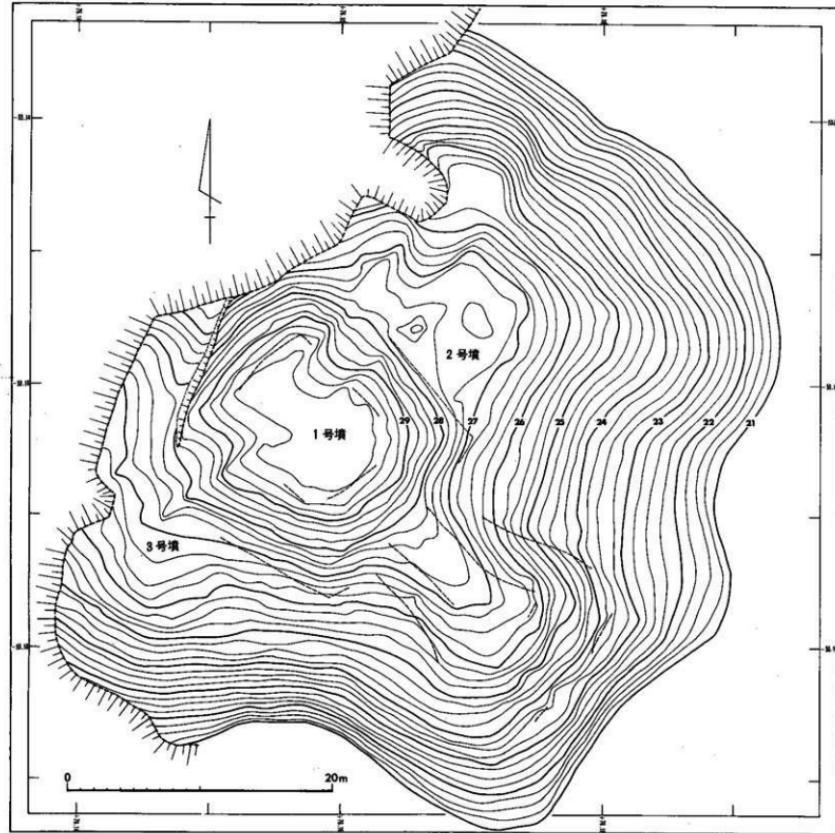
2号墳は、1号墳後方部北東辺に接して存在する。しかし、1号墳と区画する溝などは表面観察だけでは認められず、あるいは1号墳に伴う方形壇のようなものも推定できるがここでは一応古墳として報告する。これも1号墳と同様、道によって大きく変形している。墳頂平坦面は 11×8 mの長方形を呈しており、その標高は27.5m前後である。墳裾はなだらかな斜面に続き、明瞭でない。1号墳に著しく接近して存在する形態は注目される。

3号墳は、1号墳後方部南西辺に接して等高線が大きく張り出している地点に存在する。墳丘の上端、下端とも明瞭ではなく、墳形も判然とはしないが、わずかに等高線が直線になる部分や、直角に近く屈曲する部分があり、方墳である可能性が強い。標高は25.5mから26mにかけてである。1号墳後方部から南西にのびる小尾根にわずかに手を加えて墳形を整えたものと考えられる。

古墳群全体にわたって葺石などの外部施設は認められなかった。また、埴輪等の遺物の採取もなかった。

この名分丸山古墳群は、1号墳が中途から大きく開く前方部をもっており古墳時代前期にまで遡るものである可能性が強い。また、1号墳墳頂には三角点があり、四方からの眺望にすぐれた立地であることも、この推測に矛盾しない。

その他、1号墳後方部の平面形が台形に近い点、2・3号墳が1号墳に密接する群構成をとる点など注目される点の多い古墳群である。



第5図 名分丸山古墳群測量図(1 / 300)

Ⅳ 小 結

Ⅱ章で触れたように講武平野をめぐる丘陵上には多くの古墳群が知られており、それらもこれまでの予想よりもかなり遡るものもあることが判明しつつある。そして、それら古墳群も群毎に若干の時期的なズレは有しながらも、いずれもその主体部に石室や箱式石棺、あるいはその両者を採用するという点で非常に強い齊一性をもっている。

また、ほぼ全容の明らかになった奥才古墳群では、大形古墳と比較しても遜色のない遺物が中小規模の古墳に副葬されているなど大きな問題を投げかけている。そして、それらの遺物は畿内政権が地方の首長と政治的な同盟関係を結んだ際に分配される宝器と考えられており、こうした宝器を中小古墳被葬者にまで分与しなければならなかつた当時の畿内政権の政治的限界を垣間見せているように思われる。^{注13}

今回報告した名分丸山古墳群も、立地・墳形のみで前期古墳であるとした推測が許されるならば、こうした動向の中で築造されたものと考えることができよう。そして講武「平野」とはいえ、他地域の平野に比すならば、わずかな水田可耕地をめぐる丘陵上にこれほどまでの前期古墳が築造されていることは、検討されねばならないし、他地域での再検討を促しているように考えられる。

第1表 島根県下の前方後方墳

名 称	規 模 (全長, m)	備 考	名 称	規 模 (全長, m)	備 考
1 山代二子塚 (松江市山代町)	90	国指定史跡、円筒埴輪 須恵器?	9 名分丸山1号墳 (鹿島町名分)	39	本報告
2 宮山1号墳 (安来市西志江町)	52	一部調査、消滅 円筒埴輪	10 御崎山古墳 (松江市大草町)	38	県指定史跡、横穴式石 室、家形石棺
3 竹矢尚船古墳 (松江市竹矢町)	50	角形石棺	11 乃木二子塚 (松江市乃木町)	36	県指定史跡、一部調査
4 松本1号墳 (三刀屋町給下)	50	縣指定史跡、発掘調査 粘土塗2、鏡1	12 金崎1号墳 (松江市西川津町)	35	県指定史跡、壁穴式石 室、古式須恵器
5 寸井原古墳 (松江市板本町)	50	県指定史跡、発掘調査 横穴式石室、箱式石棺	13 穴殿2号墳 (仁多町八代)	29	未調査、横穴式石室
6 貝田丘古墳 (松江市貝田町)	50	発掘調査、移築保存	14 比津小丸山古墳 (松江市比津町)	25	未調査
7 道山2号墳 (安来市荒島町)	50?	未調査 円筒埴輪(須恵質)	15 古天神古墳 (松江市大草町)	26	県指定史跡 石棺式石室
8 平岡古墳 (松江市大野町)	43.5				

- 注 1. 鹿島町教育委員会が '81年から '83年まで調査を行った。
三宅博士「島根県八束郡鹿島町所在奥才古墳群の調査から」(『考古学研究』30-2)
2. 『菅田考古』16 島根大学考古学研究会 '83
3. 『鹿島の遺跡小集』 鹿島町教育委員会 '79
4. 注2、3書
5. 尾坂古墳群とは、これまで荒神古墳、中ノソラ古墳、尾坂古墳、北田古墳と呼ばれていた
ものだが、同一尾根上のものであり、群として捉える方が妥当と考えられる。
中ノソラ古墳は山本清「山陰地方村落古墳の様相」(『島大論集』9)
6. 尾坂古墳群と同様、向山古墳群もこれまで別々に呼称されていた蛭ヶ崎荒神古墳、向山古墳
を一括して呼称することとした。向山古墳については注5書。
7. 『菅田考古』15 島根大学考古学研究会 '79
8. 注3書
9. 注3、5書
10. 注3書
11. 注2、3、5書
12. 1948年山本清氏調査。概略は注2書。
13. 渡辺貞幸「寺床1号墳の諸問題」(『松江考古』第5号 '83)

図 版



名分丸山古墳群周辺航空写真（白枠が第3図に相当する）



名分丸山古墳群遠景（西から）

1号墳後方部

前方部



1号墳全景（南から）



1号墳くびれ部付近（前方部南側端部から）

鳥根原子力発電所 P R 館移設設計画に伴う

名分丸山古墳群測量調査報告書

1984年1月

発行 鹿島町教育委員会

印刷 有限会社 黒潮社